「届け！　新型コロナ平癒の祈り」

増山雄三

江戸時代から薬問屋が軒を連ね、今でも多くの製薬会社の本社がある、大阪市中央区の「道修町（どしょうまち）」には、薬の神様を祀っている「少彦名神社（すくなひこなじんじゃ）」がある。

私が天王寺師範付属小学校六年の時、社会見学の一環として、ここから通学していたクラスメートの案内で、担任の斉藤先生に連れられ訪れた事があるが、今は、新型コロナ収束が見通せないなかで、「コロナウィルス退散」を祈る神社と、ワクチン開発に取組む企業のある「薬の町」を、久しぶりに訪ねた。

道修町は、江戸初期に堺の商人だった小西吉右衛門が薬種屋を開き、次第に薬種業者が増えていったが、現在は、東は東横堀川を挟んで東高麗橋に接する一丁目から、西は西横

堀川跡の阪神高速環状線を挟んで西区京町堀りと接する四丁目まで、東西約一キロの道修町通沿いに、武田・塩野義・田辺三菱・大日本住友・小野・小林と続く、多くの製薬会社の本社や本店ビルが立ち並んでいる。

旧小西家住宅など、昔ながらの店構えの商家も残っていて、登録有形文化財や重要文化財にも登録されているが、少彦名神社は、一七八〇年に、薬の安全と薬業の繁栄を願い、少彦名命と神農災帝を祀った事が、その起源となっている神社だ。

別所賢一宮司によると、緊急事態宣言発令中に激減していた参拝者が増え始めたというが、それ以上に増えているのが、お守り等の授与品を郵送してほしいという依頼で、参拝に来られない人達から送られてくる現金書留が、今年は既に千通を超えているという。

新型コロナ感染拡大に伴い、病気平癒の祈祷依頼も増加しているが、新型コロナの場合は、何の病気なのかをはっきり言わない人が

多いので、さりげなく、「もしかして、例の件ですか？」と聞いてから祈祷しているというが、祈祷して何日かすると、「治療しましたという感謝の手紙をいただくのです」と、嬉しそうに別所宮司は話す。

大阪では、江戸時代末期の一八二二年にコレラが流行し、この時、「**虎頭殺鬼雄黄圓**」という丸薬が作られ、張子の虎の御守りと一緒に収められたというが、これが神農祭の始まりになったというが、社務所の三階にある「**くすりの道修町資料館**」の前には、この神社で疫病退散の象徴となった、勇壮な姿で吠える大きな石造りの「**虎**」が飾ってある。

今年は、神社ができて二百四十年の節目の年だが、宮司は十一月の神農祭を中止せず、実施のための準備をしているが、お守りや祈祷で病気が治る訳ではないが、「神仏に向き合う事で、手洗いなどの予防を心がけるようになる人が増えるのでは」と宮司はいう。

それでも、この所、新型コロナの勢いは世

界的にも留まるところを知らないが、それはそれとして、とりあえず、憎きコロナの収束を願って、道修町の少彦名神社に神頼みをしにでかければ、きっと、なにかの「**効能と御利益**」があるかもしれない。

令和二年九月